

源氏物語 名場面集

NO.	帖	段	頁	名場面	キーフレーズ
1	桐壺	1	①12	物語の語り始め	いつれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に
2	桐壺	2	①16	桐壺更衣へのいじめ	ここかしこの道にあやしきわざをしつつ、、、
3	桐壺	12	①46	高麗人の観相	相人おどろきて、あまたたび傾きあやしぶ
4	帚木	2	①70	雨夜の品定め	長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、、
5	帚木	15	①140	方違え、空蟬との契り	「暁に御迎へにものせよ」
6	空蟬	3	①176	碁打ち覗き見～侵入	生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり
7	夕顔	3	①197	夕顔の宿	「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」
8	夕顔	12	①234	某の院で夕顔死亡	御枕上にいとをかしげなる女みて「おのがいとめでたし、、
9	若紫	4	②22	北山で若紫発見	「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」
10	若紫	13	②60	藤壺との禁断の契り	「見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな」
11	若紫	22	②94	若紫。。いただき	「いざたまへ。宮の御使にて参り来つるぞ」
12	末摘花	13	②154	雪の朝、、正体見たり	あなかたはと見ゆるものは鼻なり、、普賢菩薩の乗り物とおぼゆ。
13	紅葉賀	1	②182	青海波を舞う	立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり
14	紅葉賀	14	②228	源氏・頭中将vs源典侍	太刀を引き抜けば、女「あが君、あが君」と向かひて手をするに、
15	花宴	2	②248	朧月夜との出会い	かやうにて世の中の過ちはするぞかし、「朧月夜に似るものぞなき」
16	花宴	6	②263	朧月夜との再会	「扇を取られてからきめを見る」
17	葵	5	③20	車争い	「これは、さらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」
18	葵	14	③44	葵の上・物の怪	「すこしゆるべたまへや。大将に聞こゆべきことあり」
19	葵	27	③92	若紫→紫の上	男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり
20	賢木	2	③114	六条御息所との野宮の別れ	はるけき野辺を分け入りたまふよりいともあはれなり
21	賢木	16	③154	藤壺寝所への侵入	心にもあらず、御髪を取り添へられたりければ、いと心憂く、

22	賢木	33	③206	朧月夜との密会、露見	「かれは誰がぞ。けしき異なる物のさまかな。たまへ」
23	花散里	3	③223	花散里を訪ねて	ほととぎす、ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く
24	須磨	9	④48	紫上を残して須磨に出立	「惜しからぬ命にかへて目の前の別れをしばしとどめてしかな」
25	須磨	15	④70	須磨の秋、源氏の郷愁	須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、
26	明石	3	④114	桐壺院夢に立つ、明石へ	「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」
27	明石	13	④156	源氏、入道の娘を訪う	月入れたる真木の戸口けしきことにおし開けたり【定家絶賛】
28	霽標	4	④202	明石姫君誕生、宿曜のこと	宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし、、、」
29	霽標	11	④233	住吉詣で、明石の上との唱和	「いまはた同じ難波なる」と、御心にもあらでうち誦じたまへるを
30	霽標	12	④242	六条御息所、必死の遺言	うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思しよるな
31	蓬生	11	⑤48	源氏、荒れたる末摘花邸へ	御さきの露を馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる
32	関屋	1	⑤66	源氏・空蝉、逢坂の関にて	「今日の御関迎へは、え思ひ棄てたまはじ」
33	絵合	8	⑤106	冷泉帝御前での絵合	須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり
34	松風	5	⑤136	明石一家大堰の邸に	人離れたる方にうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり
35	薄雲	6	⑤178	大堰邸での子別れ	声はいとうつくしうて、袖をとらへて「乗りたまへ」と引くもいみじうおぼえて
36	薄雲	13	⑤198	藤壺の宮 崩御	灯火などの消え入るやうにてはてたまひぬれば、いかひなく悲しきことを
37	薄雲	15	⑤204	夜居の僧都、秘密を奏上	そのうけたまはりしさまとてくわしく奏するをきこしめすに、あさましう
38	薄雲	19	⑤216	斎宮の女御に恋情を	見たてまつらぬこそ口惜しけれと、胸のうちつぶるるぞうたてあるや
39	朝顔	7	⑥37	朝顔の姫君つれなく拒む	人づてならでのたまはせんを、思ひ絶ゆるふしにもせん」と下りたちて、、
40	朝顔	10	⑥52	故藤壺の宮、源氏の夢枕に	漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう
41	少女	17	⑥108	夕霧・雲居雁 筒井筒の恋	「雲居の雁もわがごとや」と独りごちたまふけはひ若うらうたげなり
42	少女	33	⑥153	六上院完成 四季の町の風情	八月にぞ、六上院造りはてて渡りたまふ
43	玉鬘	7	⑥198	長谷寺 椿市宿での遭遇	「なほさしのぞけ。我をば見知りたりや」とて、顔をさし出でたり
44	玉鬘	17	⑥240	正月衣装の選択・贈呈	紅梅のいと紋浮きたる葡萄染めの御小桂、今様色のいとすぐれたるとは
45	初音	1	⑦12	新春の六条院 源氏最盛期	年たちかへる朝の空のけしき、なごりなく曇らぬうらけさには、

46	胡蝶	1	⑦46	物語中 最豪華絢爛たる遊宴	春の日のうららにさして行く舟は棹のしづくも花ぞちりける
47	胡蝶	6	⑦78	玉鬘へのけしからぬ恋情	御衣どものけはひは、いとよう紛らはしすべしたまひて、近やかに臥したまへば
48	蛍	3	⑦97	蛍に浮かぶ玉鬘	さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあきれたり。蛍を薄きかたに、
49	蛍	9	⑦116	紫式部の物語論	神代より世にあることを記しおきけるななり。日本紀などはただかたそばぞかし
50	常夏	7	⑦166	近江の君の爆笑譚	「何か、そは、、、大御大壺とりにも仕うまつりなむ」
51	篝火	2	⑦184	夏の夜、篝火を点して、、	御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり、、、御髪の手当たりなど、、
52	野分	2	⑦196	初めて見たり紫の上	春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す
53	行幸	2	⑧12	大原野の行幸 冷泉帝の麗姿	その十二月に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐを、
54	行幸	9	⑧41	旧頭中将との懐旧談	かのいにしへの雨夜の物語に、いろいろなりし御睦言の定めを思し出でて、
55	行幸	14	⑧54	玉鬘の装着の儀	亥の刻にて、入れたてまつりたまふ。例の御設けをばさるものにて、
56	藤袴	2	⑧77	多情なる15才 夕霧	かかるついでにとや思ひよりけむ、蘭の花のいとおもしろきを、、
57	真木柱	8	⑧129	髭黒北の方、逆上	にはかに起き上がりて、大きな籠の下なりつる火取をとり寄せて
58	真木柱	12	⑧140	真木柱、嘆きの歌を残す	今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな
59	梅枝	4	⑧201	明石の姫君装着、秋好中宮腰結	かくて、西の殿に戌の刻に渡りたまふ
60	藤裏葉	5	⑧242	夕霧・雲居雁、筒井筒の恋の成就	男君は、夢かとおぼえたまふにも、わが身いとどいつかしうぞ
61	藤裏葉	10	⑧258	明石の姫君入内	たちかはりて参りたまふ夜、御対面あり
62	藤裏葉	15	⑧270	冷泉帝・朱雀院、六条院へ行幸	神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり
63	若菜上	12	⑨70	源氏四十の賀宴(玉鬘主催)	正月二十三日、子の日なるに、左大将殿の北の方、若菜まゐりたまふ
64	若菜上	13	⑨81	女三の宮降嫁	御車寄せたる所に、院渡りたまひて、おろしたてまつりたまふなども、
65	若菜上	19	⑨111	ああ、忘れられない、朧月夜	今はじめたらむよりもめずらしくあはれにて、明けゆくもいと口惜しくて、
66	若菜上	28	⑨158	明石入道の長文遺書	若君は春宮に参りたまひて、男宮うまれたまへるよしをなん、
67	若菜上	37	⑨200	柏木物語の始まり(唐猫事件)	唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きな猫追ひつづきて、、
68	若菜下	10	⑩41	源氏・明石一家住吉参詣	十月中の十日なれば、神の斎垣にはふ葛も色変りて、
69	若菜下	17	⑩69	六条院での女楽	御琴どもの調べどもとのひはてて、掻き合わせたまへるほど、、

70	若菜下	24	⑩103	紫の上発病	夜更けて大殿籠りぬる暁方より、御胸をなやみたまふ
71	若菜下	26	⑩120	柏木密通	床の下に抱きおろしたてまつるに、物におそはるかとせめて
72	若菜下	31	⑩160	密通露見(源氏手紙発見)	浅緑の薄様なる文の押しまきたる端見ゆるを、何心もなく引き出でて
73	若菜下	38	⑩206	御賀の試楽・源氏柏木をいびる	「衛門督心とどめてほほ笑まるる、、さかさまに行かぬ年月よ、、、、
74	柏木	7	⑩259	夕霧に後事を託し柏木死去	「六条院にいささかなる事の違ひ目ありて、月ごろ心の中に、、
75	柏木	8	⑩270	若君(薫)五十日の祝儀	「あはれ、残り少なき世に生ひ出づべき人にこそ」とて、抱きとりたまへば
76	横笛	5	⑪30	夕霧、柏木遺愛の笛を受ける	「みづからもさらにこれが音の限りはえ吹き通さず。思はん人にいかで
77	鈴虫	6	⑪66	六条院での鈴虫の宴	「鈴虫は心やすく、いまめいたるこそらうたけれ」などのたまへば、
78	夕霧	4	⑪107	夕霧、泊る・迫る・拒まれる	「、、世の中をむげに思し知らぬにしもあらじを」とよろづに、、
79	夕霧	9	⑪136	雲居雁、文を奪う	いととく見つけたまふて這い寄りて、御背後より取りたまうつ
80	夕霧	33	⑪216	塗籠の中、ついに果たす	埋もれたる御衣ひきやり、いとうたて乱れたる御髪かきやりなどして
81	御法	5	⑪250	紫の上、匂宮に遺言	この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ
82	御法	6	⑪256	紫の上死去	まことに消えゆく露の心地して、、明けはつるほどに消えはてたまひぬ
83	幻	17	⑪318	思い出の文殻を焼く	落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、「破れば惜し」と思されけるにや
84	幻	19	⑪324	光源氏、、退場、、	もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日や尽きぬる
85	匂宮	1	⑫12	第三部の幕開き	光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、、ありがたかりけり
86	紅梅	4	⑫58	紅梅大納言、匂宮に紅梅を	兵部卿宮内裏におはすなり。一枝折りてまゐれ。知る人ぞ知る」とて
87	竹河	9	⑫104	大君・中の君 碁を打つ(源氏絵巻)	碁打ちたまふとて、さし向かひたまへる髪ざし、御髪のかかりたるさまども
88	橋姫	1	⑫164	宇治十帖の始まり	そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり。
89	橋姫	10	⑫198	薫、月下に姫君をかいま見	内なる人、一人は柱にすこし隠れて、琵琶を前に置きて、、
90	橋姫	17	⑫234	弁、薫に柏木の遺書を渡す	おし巻き合はせたる反故どもの、黴くさを袋に縫ひ入れたる取りででて奉る
91	椎本	1	⑬12	匂宮、宇治に中宿り	二月の二十日のほどに、兵部卿宮初瀬に詣でたまふ。
92	椎本	7	⑬42	八の宮薨去	人々来て、「この夜半ばかりになむ亡せたまひぬる」と泣く泣く申す。
93	椎本	17	⑬85	薫、再び姫君をかいま見	まづ一人たち出でて、几帳よりさしのぞきて、この御供の人々の

94	総角	3	⑬110	薫、押し入り、第一回目	屏風をやをら押し開けて入りたまひぬ。いとむつつけて、
95	総角	7	⑬140	薫、押し入り、中の君だ！	心しけるにやとうれしくて、心ときめきたまふに、やうやう、あらざりけりとする
96	総角	10	⑬157	薫・匂宮 ダブル押し入り	一夜の戸口に寄りて、扇を鳴らしたまへば、弁参りて導ききこゆ。
97	総角	36	⑬254	大君死す	見るままにももの枯れゆくやうにて、消えはてたまひぬるはいみじきわざかな
98	早蕨	8	⑭42	中の君、二条院へ	御車のもとに、みづから寄せたまひて下ろしたてまつりたまふ。
99	宿木	23	⑭139	薫、人妻中の君に迫る	寄りゐたまへる柱のもとの簾の下より、やをらおよびて御袖をとらへつ
100	宿木	25	⑭150	匂宮「う～ん、匂うぞ！」	かの人御移り香のいと深くしみたまへるが、、あやしと咎め出でたまひて
101	宿木	48	⑭236	薫、宇治で浮舟をかいま見	腕をさし出でたるが、まろらかにをかしげるなるほども、、まことにあてなり
102	東屋	24	⑮80	匂宮、浮舟をとらえる	扇を持たせながらとらへためひて、「誰ぞ。名のりこそゆかしけれ」とのたまふに
103	東屋	39	⑮126	薫、三条隠れ家で浮舟を	「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさびて、
104	浮舟	9	⑮178	匂宮、薫をよそおい浮舟を	女君は、あらぬ人なりけりと思ふに、あさましいみじけれど、声をだに
105	浮舟	17	⑮216	このうき舟ぞゆくへ知られぬ	いとはかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて
106	蜻蛉	5	⑯42	薫、匂宮にあてこすり	また、かれも、なにがし一人をあひ頼む心もことになくてやありけむとは
107	蜻蛉	11	⑯87	薫、女一の宮をかいま見	「いな、持たらじ、雫むつかし」とのたまふ、御声いとほのかに聞くも
108	手習	2	⑯136	浮舟、僧都に発見さる	疎ましげのわたりやと見入れたるに、白き物のひろごりたるをぞ見ゆる
109	手習	8	⑯158	浮舟失踪前のことを回想	いときよげなる男の寄り来て、「いざたまへ、おのがもとへ、と言ひて
110	夢浮橋	12	⑯308	物語の語り収め	人の隠しすゑたるにやあらんと、、、、、、とぞ、本にはべめる